長野県立大学リポジトリ
THE UNIVERSITY OF NAGANO REPOSITORY
信州共同リポジトリ
REPOSITORY OF SHINSHU

『新可笑記』巻一の一「理非の命勝負」論

著者	平林 香織
雑誌名	長野県短期大学紀要
巻	63
ページ	93-105
発行年	2008-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1118/00000159/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

長野県短期大学紀要　第63号　2008年12月
Journal of Nagano Prefectural College, No.63, December 2008

長野県短期大学
〒380-8525 長野市三輪 8-49-7

『新可笑記』巻一の一「理非の命勝負」論

On 'Rihi no Inochi Shoubu' in "Shin Kashoki" Vol.1 No.1

平林香織 Kaori Hirabayashi

一　はじめに

作品の評価は時代とともに変化する。研究の進展によって作品の評価が高まるということもある。元禄元年（一六八八）十一月刊大本五巻五冊二十六話所収の井原西鶴浮世草子第十一作『新可笑記』は、西鶴作品の中でそういう作品だ。研究史上、長編的構想をもつか短編集か、悲劇的内容か喜劇的内容か、政策肯定か政策否定か、礼賛か皮肉かと、作品の読みが対照的になりがちな西鶴浮世草子であるが、『新可笑記』に関しては、作品そのものの評価が全否定から全肯定へと百八十度変化している。本書の評価はまさに今塗り替えられつつあるといってよい。

さまざまなかたちで先学が明らかにしているように、大正期の片岡良一[1]以来、暉峻康隆らによって長年低い評価が与えられてきた[2]『新可笑記』は、西鶴存疑作の筆頭に挙げられることもしばしばあった[3]。

金井寅之助も、書誌学的調査によって本書版下に西鶴筆とそうでないものがあるとし、「期日迫っての慌しい出版であり」、「ある無名の作家が書いた。団水あるいはそれほどの作者が加筆訂正した。西鶴も部分的に筆削するところがあった、と見てよい」と判断する[4]。その上で、章題の上につけられた数字を囲む枠のデザインの違いに西鶴が作品を編集した過程の痕跡を認め、すべての話を枠のデザインごとに四種類に分類する。巻一の一「理非の命勝負」をはじめとする四話を含む第一のグループの話は「それぐ〜まとまりのある章で、新しい見解も見られ、本書のうちでは出色のもの」として、低調な作品でありながら一部にはすぐれた話も見られることを認めている[5]。同様に森田雅也も、「構成における不統一性、甘さが指摘できることは否めない」としつつ、「身分を超克した西鶴の創作視点」が「『新可笑記』の世界に貫徹して潜む」として、本書を部分的に評価する立場をとる[6]。

ところで、書誌的な問題点と内容的な不備とは必ずしも一致するものではない。加えて、いくつかの話が実際の大名家に起きた事件をもとにしていることが判明したり、中国や日本の古典作品の中に新たな素材が発見されたりすることよって、本書一話一話の構成やテーマが、従来とは違った角度で論じられるようになった結果、本書の評価が高まりつつある。

その推進力となっているのが杉本好伸の精力的な作品解析と新典拠提示による『新可笑記』再評価の試み[7]である。また、広嶋進は新たに作品の全訳注を行い[8]、最近の論考[9]において「隠れた西鶴武家物の傑作として賞揚されるべき作品である」と、本書を高く評価する。橋本智子も、一見したところ分裂しているような印象を与える構成や表現は、「作者の創意」を潜ませる「趣向」であるとして、評価の見直しに取り組んでいる[10]。藤原英城は、従来指摘されてきた版下や体裁の上での不備・不体裁について、「出版に際して修正を施した痕跡の窺えるものとそうでないものとの区別があること」を指摘し、不備は必ずしも不備ではなく、その中には「西鶴自身の意図・作品解釈を最大限具現化したもの」もあり、本文自体に解釈の割れを導き出す「西鶴の巧妙な仕掛け」の可能性があることを示唆する[11]。松村美奈は、〈裁き〉というキーワードのもと、本書における親子関係を扱った裁判の話が、「単に名裁判や推理趣味を描き出そう」としたものではなく、「親子という親密な関係にひそむ危うさを描き出す」ものであると評価する[12]。そして、篠原進は、『荘子』の「寓言論」を方法論とした作品として本書を定位し、西鶴が「〈今〉を撃つための、寓言化されたレトリックとしての笑い」を描こうとしたものであり、「一見、雑然とした各話」の「混沌の奥に朧げながら見えてくるものがあ」り、それは、「上に対する厳しさとは裏腹に」「社会的な敗者、すなわち、運命に翻弄され、もはや笑うことしかできない彼らに向ける」優しい視線であり、本書は、鶴字法度に発憤した西鶴の熱き書であるとする[13]。

以上のような啓発的な作品解釈が展開しつつあり、作品理解の

深まりが、研究の熱さを誘発しているといえよう。

二　問題の所在

『新可笑記』は、不思議な魅力を持つ作品だと思う。

一般には、『新可笑記』は、武家物第三作とされている。しかし、山口剛が早くから「話の重心は必ずしも武士生活、武士精神にはない」と指摘[14]し、野間光辰が「『可笑記』踏襲を標榜し、武士道教訓書の如き外観を呈してゐるが、「実は教訓的といふよりも説話的興味に多く傾いてゐる。（中略）本質的には『西鶴諸国ばなし』『懐硯』等の雑話物と何等異なるところはない」と述べている[15]ように、先行する『武道伝来記』や『武家義理物語』とは一線を画す作品といえる。

冨士昭雄も、「西鶴が武家を主題とした説話を集めようとした意図」を持っていたにもかかわらず、「内容は雑多であり」「武家以外の話も収められている」と述べている[16]が、武家物第三作という言い方は後世のものであるから、作品に武家物としての統一性を求める必要はない。森田雅也は、所収話の五分の二が「非武家の者を主人公としたもので」あり、「武家物としての希薄性は、観点を変えれば、武家物からの脱却」であり、「『世の人心』を創作視点とする、町人物などに通じる世帯人情を対象とした西鶴特有のものと同質」であると指摘する[17]。一方で、杉本好伸、広嶋進、篠原進らがそうであるように、「武士社会に対するアイロニックな作者の視点[18]」や「武家の政道批判や政治批判[19]」の立場から、「当世武士の内実を剔出[20]」した挑発的な一書であるとも言われる。とらえどころがないのか、ありすぎるのか……。

そして、一見千差万別な話の集積と思われる割には、複数の話にいくつかの共通コードを見出すことも出来る。すでにみてきた論者たちのうち何人かは、全二十六話をいくつかの視点で分類した上で論述を展開している[21]。いわば、テーマ別、素材別、モチーフ別に分類しやすい作品といえる。

杉本好伸は、巻毎の関連性について検証し、「一巻中のほぼ三話ないし二話といった続きの章間で、内容に関わるモチーフ、筋立てに関わるプロットといった作品形成の基本軸に関して、確かな関連性の存すること」を指摘し、「ある関連性を有するグループ中の一話が、他の関連性を有するグループとも別の諸点で併結し、両者が連鎖していく」構造も明らかにする[22]。さらに、〈二人話〉〈三人話〉〈金欲話〉〈養生話〉〈出家話〉〈動物話〉といった話柄による共通点や、謡曲や『大学』『荘子』といった出典の共通点などによって巻毎の特質を分析した上で、作品全体の構成への配慮があったことを論じている[23]。

広嶋進も、「巻一、巻二には、『非・理・法・権・天』の問題に関わる章が多く見られる」こと、「巻三以降では、巻一、二と同一のテーマやモチーフの発展が見られる」一方で、「心の虚実（嘘と実）を趣旨とする」話、「政治及び政道批判」の話、「浪人の仕官を巡る話」「家業専一、武芸専一」というテーマの話、「善悪の転変」というテーマの話がそれぞれ二、三話ずつあるという読みを示す[24]。

それは『本朝二十不孝』に通じるような巻毎の親和性[25]のようでもあり、全体的に共通する色調のようでもある。「同類のものを並べようとする創作意識」があり、一読して、「よく似た二人」「虚と実」「天」という和音が響いていることに気づく[26]。ここでもそのような話型分類を試みたい衝動に駆られはするが、その点に関しては別稿としたい。

結論的にいえば、同じかたちだったりバリエーションを加えたりして、一つのテーマが繰り返し出現するソナタ形式の交響曲のような流れとまとまりが強いのが本作の特徴だといえる。個々の話それぞれの面白さと、話を読みつなげ、各話の残響の中に身を委ねる楽しさとが共存する作品なのである。そういう意味で、『新可笑記』巻一の四「生き肝は妙薬のよし」について述べる次

の篠原進のことばは正しい。[27]

人智を越えた虚無感。その正体を敢えて詮索すれば、社会的な存在としての人間が生きていくうえで必ず直面する、決して逃れることの出来ない宿命のようなものと言ったら良いだろうか。生きるということは、選び取り、選び取られることでもある。眼前に広がるさまざまな選択肢。意識、無意識にかかわらず、わたしたちはその一つを選びとりながら生きている。（中略）リニアな時間を生きる、すべての人に定められたルール。そうした宿命を可視化する装置として、それを照らす光源として、西鶴は「死」が日常化されている武家社会を使うのである。

「選び取り、選び取られること」が常に目の前にやってくる状態は、「よく似た二人」が、別々の選択をした結果、「虚と実」の明暗に袂を分かち正反対の結末を迎えるというパターンが繰り返されることで強調されていることにもなる。しかし、それは武家に限ったこととばかりはいえない。

〈選択〉ということについていえば、『懐硯』や『本朝二十不孝』『武家義理物語』にも共通するモチーフが出現することがある。『懐硯』巻五の一「俤の似せ男」や『本朝二十不孝』巻四の一「善悪の二つ車」のように、「よく似た二人」はしばしば西鶴が使う人物設定である。

また、西鶴作品にはさまざまなかたちで兄弟姉妹が描かれており、その点に関して次のように述べたことがある。

対立する兄弟、同調する兄弟、交錯する兄弟、変化する兄弟など、実に、さまざまなバリエーションで西鶴は兄弟姉妹を描いている。そして、時には二組の兄弟姉妹を登場させながら、各作品のテーマや題材に即したかたちでそれぞれの話における兄弟の関係性を構築している。共通点と相違点を併せ持つ兄弟という存在は、相対的多面的な西鶴の作品世界にいかにも相応しいモチーフでもある。

孝と不孝、愛情と憎悪、欲望と無欲、生と死、美と醜。そのどちらかを求めたり、どちらかを消去したり、どちらかが選ばれたり選ばれなかったり。時間的にずれてこの世に登場した兄弟は、あらゆる社会的関係の基本ともなる。西鶴は、実に巧妙に兄弟姉妹の関係性を利用しながら、ひとつひとつの兄弟話において人間社会の本質的な構造を抉り出している。[28]

また、「死が日常化されている」ということについていえば、それは、食うか食われるかという生活を強いられている貧しい人々や、漁師のように命を張って危険を伴う生業に携わる人々について、そうでなくても、不慮の事故や病気に突然襲われないとは限らないすべての人々について当てはまる人類共通のテーマともいえる。本書が下敷きにしている『可笑記』がしばしば援用し、また、西鶴自身も好むところであったと思われる『徒然草』は、「メメント・モリ」と繰り返し言う。「人はたゞ、無常の身に迫りぬることをひしと心にかけて、束の間も忘るまじきなり」（第四十九段）「命は人を待ものかは」（第五十九段）「死期はつゐでを待たず。死は前よりしも来たらず、兼て後ろに迫る」（第百五十五段）といったフレーズは、人々の頭にこびりついているものだろう。『徒然草』によらなくても、さらに言うならば、武家社会を使わなくても、「社会的な存在としての人間が生きていくうえで必ず直面する、決して逃れることの出来ない」「宿命を可視化する」[29]ことはできるだろう。

言い換えれば、本書は、極めて普遍的なテーマを内包した懐の深い作品であるとみなすことができる。

そのことを踏まえた上で、さまざまな先学の恩恵に浴しながら、従来の論とはまた別の視点から、『新可笑記』巻一の一「理非の命勝負」について考えることよって、『新可笑記』の魅力の一端を明らかにしたい。

三　巻一の一「理非の命勝負」の解釈

『新可笑記』巻一の一「理非の命勝負」の話の内容を広嶋進による梗概によって示す。[30]

九州のある国に、奈良春日の里から、舞曲の巧みな美少年二人が招かれた。人々は七夕の夜、城内の舞台で踊りを堪能した。が、その間にお納戸の五百両が盗まれてしまった。若殿は犯人探索を命ずるが見付からない。ついに納戸奉行四人の切腹かというとき、宇土の長浜の行者が、神通力で真犯人の武士を見破った。武士と行者は互いに自分の正しさを主張して譲らなかったが、拷問の末、武士は行者の命を惜しみ、真実を告げて絶命する。以後この国の人々は質朴正直になり、道を守るようになった。

金井寅之助が「話柄といひ、まとまりといひ、文章に若干の疵はありながらも本書の中で最も感銘を与へるもので、巻頭に置かれたのは当然である」[31]と高く評価した作品である。

以来、本話の眼目についてはさまざまに解釈されてきた。

浮橋康彦は、「話の核心は、「神道の行者（検察側）と容疑者の、命がけの対決にあるのである」「人間ドラマの主人公として、その魂のありようまでが描き出されているのは容疑者（犯人）である。主題は、犯人さがしというよりも、容疑者の抵抗と告白の動機にある」と述べる。[32]確かに、容疑者が、拷問が苦痛だったからではなく、しかもほとんど意識を失いながら絶命寸前に、「世の宝」としての人相見の命を惜しいと思ったことを理由に自白にいたるという点に、読者の意表をつく展開がある。

拷問の末の侍の告白を見てみよう。

世にはかかる不思議もあり。人相を見て大事を知る。宮内当国の重宝、この御家なほ治まるべき瑞相なり。その金盗人我なり。心の外なる事にさしつまり、傍輩の難儀をかへりみずしてこれを盗みぬ。無刀の大賊、不仁の凶徒に劣れり。今呵責の苦しみによって白状申すにはあらず。それがしこのまま命終はるにおいては、世の宝なる宮内が命の程の惜しまれ、最後に至ってかくは言ひ残し侍る。その五百両の金子、はや百五十両自分の要用に使ひ、残り三百五十両は我が住みし屋敷の泉水の北の方なる岩組みの根に

「『新可笑記』の各章に、或る「教訓」を期待する」井口洋は、この侍の告白の問題点として、次の三点を挙げている。[33]

①「人相を見て大事をしる」ということは、犯人と名指された時点ですでに、本人が「だれよりもよく思い知っていたはずのことであった」という点

②「それがしこのまま命終はるにおひては」「宮内が命の程の惜しまれ」とあるが、拷問を受ける時点で白を切りとおして「宮内が五体八割きにな」すという当人自身の望みと矛盾する点

③拷問の当初から宮内自身も命を惜しむ様子はなく、その覚悟のほどはわかりきっていたのに、「最後にいたって」ようやくそれを認めた点

「『最後にいたって』ようやく、以上三点の事実を認めたという、いささか間延びした話」[34]だという指摘は、まさにその通りだと考える。そして、その矛盾点を説明するものとして、本話のタイトル「理非の命勝負」を鑑みつつ、次のように述べる。[35]

宮内卿正連は、その犯行は見抜きながらも、なお、この侍に「武士の心根」を、しかも「つよ」く「頼もし」いものとして認めた、そのうえで、「非」にかけられた「命」はやはり「取」るべきであるという考えを示した。他方、みずからも侍むところのあった「武士の心根」を認められた侍は、そのことによって（中略）たとい「非」に対してであろうと「命」さえかければ「武士の心根」にかなうという考えを捨て、「理」にかけられた「命」こそ「当國の重宝」として「御家なを治まるべき瑞相」、「世の宝」であることに目覚めた

つまり、自分の「武士の心根」が対決の相手に認められたことをきっかけとして「非」の敗北を認めたというのであるが、それでは自己満足的な、それこそ「いささか間延びした話」のようにも思われる。命の瀬戸際の侍の長口上における矛盾点の説明としては不十分ではないだろうか。

一方、杉本好伸は、本話は「藩主の愚」を告発するものであるとして次のように分析する。[36]

殿も老中も役人も皆、この事件を機に自らの〈愚〉をさらけ出していた、ということになる。舞曲の美童を見られぬ者たちに「あはれみ」をかけ、場内に舞台を設え、「すゑ〳〵の万人自由に見るため」に土座を開放した、その殿が、一旦事が起こるや、「城下の道すじ人馬の往来をとゞめ、一國のわずらひ」となるのを放置する。この余りにも極端な変身ぶりにも、既にその〈愚〉の一端はあらわれていた。

筆者も盗難事件そのものへの理解という点では、右の読みに賛成である。

春日の里からの美童の舞が行われる七夕の日、きょうは特別な日だからと、家来たちがそれぞれの持ち場を離れるのを横目が多めに見ていたと書かれているし、明け方近くなってそろそろ舞曲の上演が終了するというので、四人いた納戸奉行全員が、「一人ひとり見る事を急ぎ」、舞を見に出払ってしまい、金子置き場に誰も見張りが居ないという状態になったことが強調されている。「勤め所空けらるる事疎略」と叱責され、「その身無沙汰よりおこりぬ」と納戸奉行の責任が問われ、結局四人とも自ら切腹を覚悟しているから、盗難事件を描きつつ、実は、その事件を誘発する原因が周囲にあったことを告発する話と考えるのが自然な読みといえる。ただし、本書の眼目が「藩主の愚」を告発するものとまでは考えない。盗みを働いたものと、盗まれるような状況をつくったものとどちらが悪いかということは、簡単には断ずることのできない微妙な犯罪心理学的問題だと考えるからである。

話は変るが、北海道旭川の旭山動物園は、数年前に廃園寸前の状態だったものを建て直し、今や北海道有数の観光スポットとして千客万来の園となったことで知られている。旭川駅からバスで四十分という立地条件であるにもかかわらず、四季を通じて平日休日を問わず賑わいを呈しているという。そして、地元の方のお話によると、観光客だけではなく、掏りの集団もまた全国から集まってきているそうだ。二十五万円を一度に掏られた来園者がいるとニュース番組で報道されたとのこと。視聴者は、二十五万円という被害額の大きさにも驚きを禁じえなかっただろうが、入園料八百円の動物園に二十五万円を持参するという行為に多少の疑問を持ったのではないか。かといって、自業自得と言ってしまっては元も子もない。空き巣の大半は、鍵をかけないまま留守にしている家に侵入しているという。法律的同義的責任を問われることはないだろうが、はたして犯罪を誘発した側には、まったく責任がない、といえるだろうか。地方に暮す人々の中は、これほど物騒な世の中になっても、外出時に鍵をかける習慣がない人も多いと聞く。しかし、悪いのは盗んだ側にあることは自明の理である……。

閑話休題。

杉本も指摘するところであるが、『徒然草』第百四十二段は次のように言う。

世を捨てたる人のするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづにへつらひ、望み深きを見て、むげに思ひくたすは僻事なり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからむ親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗みもしつべきことなり。されば、盗人をいましめ、僻事をのみ罪せむよりは、世の人の飢へず、寒からぬやうに世を行はまほしきなり。人、恒の産なき時は恒の心なし。人窮まりて盗みす。世治まらずして、凍餒の苦しみあらば、咎の者絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはんこと、不便の

わざなり。

さて、いかにして人を恵むべきとならば、上の奢り費すところをやめ、民を撫で、農を勧めば、下に利あらむこと、疑ひあるべからず。衣食世の常なる上に僻事せん人ぞ、まことの盗人とはいふべき。

治世不安な折の貧窮からの盗みの責任は治世者にあるとし、最後に、「食世の常なる上に僻事せん人ぞ、まことの盗人とはいふべき」と付言する。

本話において、盗みの理由は明らかにされていないが、侍は「心の外なる事にさしつまり」、同僚がどれほど迷惑するかということを考えもせず金を盗んだと言っている。そもそもこの侍は、人相見が推理しているように怪しまれずに納戸行くことのできるほどの高位にあったわけで、人相見が彼を犯人と断じたときにも、老中は、「歴々の侍」であるから犯人であるはずがないと言っている。『徒然草』の文脈に即していえば、困窮のあまり「凍餒の苦しみ」により盗みを働いたというわけではなさそうである。「心の外なる事」というのが、どれほどの緊急性のあることで、また、侍が止むに止まれぬ状況に追い込まれていたかどうかということは不明だが、「百五十両自分の要用に使ひ、残り三百五十両」を池に隠したということは、とりあえず必要だったのは百五十両だけだったということがわかる。禄を食むものである以上、普通に勤務し、普通の生活をしている限り、衣食に困るはずはない。「不便のわざ」の罪として同情の余地があるとは思いにくい。しかも、三百五十両もの大金を無駄に池に沈めている。といって、先に述べたように盗みを誘発する状況が前半部から丁寧に設定された挙句のことであるから、「衣食常の世なる上に僻事」をした「まことの盗人」とも断定しにくい。

つまり井口の指摘する三つの矛盾点のほかに、何のために百五十両の金を必要としたかという犯罪捜査にとってもっとも重要な要素である動機が明らかにされていないことと、五百両のうち三百五十両が未使用のまま返されたという違和感があるのである。さらに、藩主が盗みを働いた犯人に対して、「もっとも大悪心なれども、大事に人の命を思ふこと、武士の心底」と感服しており、盗みという犯行を無化してしまっており、犯人探しという当初の目的から結論がずらされている感がある。

このような、告白の矛盾点や、話の最後にいたっての違和感は、丁寧に本話を読むものならば、誰でもが気づくものであろう。

杉本好伸は、冒頭と末尾の間に言わば一種の〈落差〉が生じる点や国主の行動の矛盾から「何か屈曲したものが潜んで」いると指摘し、その「屈曲」について、犯人の侍は、拷問を受けても白を切りとおせる自信があったにも関わらず、たとえ相手が口を割らないまま拷問死して、自分が観相の失敗の汚名を着せられたとしても、犯人の後を追って死ぬ覚悟だと知って、相手を侮る心が払拭され、「自分以上に心根の強さを持つ相手であることが否応なく評価されるに至って、そこで始めて、犯人は相手の存在を『當國の重寶』と認め、命を救う気持ちになったのではなかったろうか」と推論する。そして、自白した犯人の行為の真意を理解できぬまま、「人の命を思ふもの」と賞賛する藩主の〈愚〉を指摘する。[37] 丁寧な読みではあるが、誰もがそのような推論を一つ一つ重ねて読んでいくとは言いがたいだろう。

ところで、見方を変えれば、井口・杉本両氏の解釈の根拠は、侍の告白や結末の矛盾・違和感に起因するのであり、そこにこそ、西鶴の「仕掛け」があるとはいえないだろうか。

杉本は、本話を、「目先を奪う趣向の影に、諷意をさり気なく忍ばせて」おり、それを「想像させるだけのものを孕んでいる話」として高く評価するが、[38] 理と非のどちらに命をかけるかという命題であるにせよ、藩主の愚の内実にせよ、読者に疑問を持たせることによって、何かが孕んでいると思わせ、あれこれと想像をめぐらすことを強いる表現となっていることは否定できないだろう。

では、なぜ、西鶴はそのような表現をとっているのだろうか。

実は本話にはもうひとつ矛盾点がある。それは、観相をめぐって展開される状況に潜んでいる。さかのぼって考えてみよう。

四　人相を見るということ

広嶋進が、本話の梗概を記述するにあたって、「行者が、神通力で真犯人の武士を見破った」と書いているが[39]、実は、正連はいわゆる神通力は使ってはいない。観相に至るまでの経緯を確認してみよう。

「神道の行者、浮橋宮内卿の正連といへる人」は、「平生真言の行力をもつて、人相見る事」ができた。犯人探索のために城下の道が人馬通行止めになり、「国中の難儀」となっていることを案じた正連は、自ら犯人捜査協力を申し出る。

家中全員の人相を一人ひとり見た上で、「百三十七人目の茶小紋の上下着したる人」が犯人であると断言する。名指しされた侍は、犯人であることを否認しつつ、「理非明らかなる所なり。それ人相をもつて善悪を知る事、唐土の袁天綱、我が朝の晴明ごときさへ、偶中といふ事もあり。いはんやその方の凡慮にて、人相の家職は価を奪ふの賊なり。我に何の見所ありて罪に落とすや」と、逆に正連に詰問する。「観相に対して懐疑的で、袁天網や晴明でさえ当て推量ということもあるから、「その方の凡慮」など通用しないと自信たっぷりに言い切る。つまり犯人は、観相という行為が所詮人間の能力に依存した当てもの的なものに過ぎないことを主張する。

それに対して、正連は、「もつともなり」とそのことを認めている。ただし、「天理の常をもつて」観相すれば、必ず当たると反論する。逆に、「天理」をもって観相をしない場合は、はずれてしまう危険性があることを示している。

『和漢三才図絵』巻七人倫類には「相人（にんさうみ）」の項目があり、「相は省視なり。広博物志に云ふ、伯益始めて獣を相る。周の史佚人始めて人を相る」と、中国の相術の歴史が紹介され、「凡そ耳厚くして堅く、聳として長き者は寿相なり。短き者は殀の相なり」というように、面相の見方がいろいろと書かれている[40]。福耳、三白眼と言われるような現代に通じる人相のポイントが説明されていて、観相学が社会的に認知されていたことを示している。時代が下ると観相学の祖といわれる水野南北（一七六〇―一八三四）が登場するが、本話における観相は、そのような術とはほど遠いものになっている。

以下の正連のことばは、神通力としての神がかった観相について言及するものではなくて、「一般人が日常的に口にする、『目は心の窓』なることを言っていたにすぎない[41]」。

貴方の明徳門の文字の見やうは、諸人の顔色とは事変はり、面体は仰き見んとも、瞳子にては地を見る事、これ第一の目付けなり。されば眼は神明の宅にして明鏡のごとし。胸中に邪あれば瞳子正しからず。心ここに在らざれば見れども見えざるにはあらずや

ここで明らかなことは、「人相を見る」といいながら、その実、挙動や態度を読み取り、また、「神明の宅」としての目つきで判断するという合理的実践的経験的なものになっているということである。経験知とでもいうべき人間に対する観察力や洞察力の表れとして「観相」というモチーフが利用されているといえよう。もちろん真言宗を修める道士が人間観察にすぐれているということはありえることであるが、実は、正連が行っていたのは「真言の行力」としての観相とはほど遠いものだったということになる。

この矛盾点をどのように理解すればよいのだろうか。

前節三で確認したように、大和春日の美童が、七夕の舞をするために鳴り物入りで城内にやってきたことを強調しつつ、盗みが起こる素地が城中にあったことを暗示し、さらに、観相という一見信頼のおけそうな行為の危うさを述べ、さらに、結末部分においては、矛盾に満ちた告白を犯人にさせ、それに対して本筋とず

れた藩主の対応を記すという仕掛けが本話にはある。

ここで、「人は虚実の入れ物」というよく知られた『新可笑記』序文のことばが想起される。序の全文は次のとおりである。

笑ふにふたつあり。人は虚実の入れ物。明け暮れ世間の慰み草を集めて眺めし中に、昔淀の川水を硯に移して、人の見るために道理を書続け、是を可笑記として残されし、誰か笑ふべき物にはあらず。此題号をかりて、新たに笑はわるる合点、我から腹を抱へて、知恵袋の小さき事、生まれ付きて是非なし。

序文に続く巻頭の一話は、「盗み」という問題において、「観相」という通力において、さらには、死ぬ瞬間というの人生の一大事におけることばさえ、それが虚ともなり実ともなる反転構造を内包していることを物語っているとはいえないだろうか。

序文にはまた『可笑記』という「題号を借りて、新たに笑はる合点」であるという作者の宣言がある。三浦邦夫は、『可笑記』は、「侍の柔懦、為政者の不明に対する厳しく激しい批判」を展開したものであり、「今日あるべき主君と侍の在り方を論ずることへと志向させていく」作品であることを証明している[42]。そのような、『可笑記』に展開された「道理」とは一線を画した笑いの書として西鶴は本書を執筆したといっている。

巻一の一では、盗みという道理に反する行為を糾弾する事件について長々と描写し、最後の城主の一言が盗みを無化してしまう。つまり、そこには、道理であるかどうか、理であるか非であるかという議論を超えた論理構造がある。

換言すれば、「理非の命勝負」は、命をかけた勝負そのものが「笑はるる合点」となった話ではないだろうか。その笑いは、「寓言化されたレトリックとしての笑い」に他ならないだろうが、何を寓しているかということを断定できないものとなっている。逆にいうと、さまざまに考えうるところに西鶴の目論見があったのではないか。本話の寓意がさまざまに議論されてきたこと自体が何よりもあきらかにしているように、一つの事件、一つのできごとが起きたときに、さまざまな判断が発生し、意味や教訓があれこれと取り沙汰される。事件とは、人の営みとはそのようなものであることを示す仕掛けが随所に仕組まれて話が展開している。逆説的に考えれば、一つのできごとの背景には、さまざまな事情や思いが錯綜しており、いろいろと思いをいたすことで人間の行動の不可思議さや底知れない人間心理の内奥に多少なりとも迫ることができる。「理非」は命をかけて勝負してさえ、なかなか一筋縄では明らかにならない……。

ここで、話は迂回するが、日本文学に描かれたさまざまな「観相」について概観してみよう。

五　日本文学における「観相」について

正連が引く袁天網は、隋末から唐代にかけて活躍した方術士で、人相を観ることに精通していたという。『唐書』『新唐書』、また、『太平広記』にその事跡について紹介されている。『太平広記』は、巻二百二十一から巻二百二十四まで、「相一」～「相四」として、相術に関して記術し、中国における観相学の隆盛ぶりを想像することができる。そこには、全部で五十五人もの人相見が登場するが、袁天網はその筆頭に掲げられている。また、安倍晴明の名前も出されているように、早くに中国で確立された相術は、中古以来さまざまなかたちでわが国の文学作品に登場している。

その中でもっともよく知られているものが『源氏物語』「桐壺巻」における、光源氏に対する観相であろう。これは、王権をめぐる物語としての『源氏物語』全体の構想に関わる重要なエピソードである。改めてここに記すのもはばかられる有名な条であるが、論の展開上、『源氏物語』本文に即して経緯を確認しておきたい。

光源氏の将来を案じた桐壺帝が、宮中を訪れていた「高麗人（こまうと）」の中のかしこき相人に、七歳になった光源氏を観相させる。相人

は、「国の祖と成て、帝王の上なき位に上るべき相をはします人の、そなたにて見れば乱れ憂ふることやあらむ、おほやけのかためと成て、天下をたすくる方にて見れば、又その相たがふべし」と予見する。国父となる相を持っているが、帝位につくと治世が乱れ、憂慮する事態が起きてしまうだろうが、かといって、補佐的な役に就く相ではないと言われ、桐壺帝は、「かしこき御心に、大和相を仰せて」重ねて観相を依頼する。「思し寄りにける筋なれば、いままでこの君を御子にもなさせ給はざりける」帝は、父親として、また、帝王として、さらには、最愛の桐壺更衣の死について思いをめぐらすなかで、常々光源氏の将来に関して考えるところがあったために、その裏づけをとるために、重ねて相人を招いて、光源氏を見せたという経緯を読み取ることが出来る。帝は、さらに宿曜道の達人にも光源氏の運勢を観てもらうという念の入れようで、その結果も観相と同じであったために、「際ことにかしこくて、たゞ人にはいとあたらしけれど、親王と成たまひなば世の疑ひをひ給ぬべく物し給へば」、皇子とはせず、臣下に降下させ源氏を名乗らせることとする。

ここで明らかな点は、高貴な生まれの人間に対しては、様々なかたちで占術が行われ、その将来の安泰を保証すべく様々な手立てがとられたということに加えて、桐壺帝が、帝王として、また、父として、光源氏の将来を考えた結果、自身の観察と父親としての直観により、さらには、母親である桐壺更衣の死をめぐる様々な状況を勘案し、光源氏の宿世について感得するところがあったということである。それは相人に依頼するよりも前に、最愛の人の忘れ形見である愛しい我が子に対する深い洞察から得られたものだといえよう。また、見方を変えれば、高麗人の相人、大和相、宿曜師らに再三確かめさせているということは、自分の感覚がもしかしたら違っているのではないか、あるいは、違っていて道を誤ってしまっては大変であるという不安と慎重さの表れといえる。そして、一人だけではなく三人の占術を試しているということは、彼らの言うことがあくまでも予見であるし、占い師である前に人であるから、人としての間違いが必ずありうる、ということを帝が十分認識していることを暗示している。結局三人に同じことを言われたことで、自分の直観に間違いがないであろうことが、より一層強固に確かめられたことになる。

ある意味で帝は、観相や占星に対して半信半疑であったわけだが、統計学的な見地から発生した観相学や五行思想の考察から天文学的に発生した宿曜が、生きていくための安定と自信を与えるものとして社会的に認知されていたことが理解できる。そして、父として帝としての桐壺帝の慧眼が先行していたことを記述していることから、桐壺帝の帝王としての資質の高さと光源氏に寄せる愛情の深さが暗示されている。

このように、主人公の英雄性を保証するものとして観相が利用されているのは、『大鏡』も同様で、相人は、藤原道長が、将来高い地位に就くことを予見する。

女房どものよびて、相ぜられけるついでに、「内大臣殿（道隆）はいかゞおはす」などとふに、「いとかしこうおはします。天下とる相おはします。中宮大夫殿（道長）こそいみじうおはしませ」といふ。又、あはた殿（道兼）をとひたてまつれば、「それも又いとかしこくおはします。大臣の相おはします」。又、「あはれ、中宮の大夫殿（道長）こそいみじうおはしませ」といふ。又、権大納言殿（伊周）をとひたてまつれば、「それもいとやんごとなくおはします。いかづちの相なんおはする」と申ければ、「いかづちはいかなるぞ」とゝふに、「ひときはゝいとたかくなれど、のちとげのなきなり。されば、御するゑいかゞおはしまさんとみえたり。中宮の大夫殿（道長）こそ、かぎりなくきはなくおはしませ」と、ことと人をとひたてまつるたびには、この入道殿（道長）をかならずひきそへたてまつりてまうす。「いかにおはすれば、かく毎度にはきこえたまふぞ」といへば、「第一相には、とらの

子のふかき山のみねをわたるがごとくなるを申たるに、いさゝかもたがはせたまはねば、かく申はべるなり。このたとひは、とらの子のけはしき山のみねをわたるがごとしと申なり。御かたち・ようていは、たゞ毘沙門のいき本みたてまつらんやうにおはします。御相かくのごとしといへば、たれよりもすぐれたまへり」とこそ申けれ。いみじかりける上手かな。あてたがはせたまへることやはおはしますめる。

右の引用から明らかなように、相人を招いたのは女房たちであって、彼女たちを観相するついでに、道隆、道長、道兼、伊周の観想が行われたことがわかる。もちろん、記述の目的は、道長の吉相について言及することにあるわけだが、たまたま女房たちのところに来た相人に、半ば、興味本位から、男性群に対する観相が求められたことが理解される。そして、「あてたがはせたまへることやはおはしますめる」と書かれて、実際の道長のその後が、相人の予見どおりになったことが確認される。『源氏物語』において、相人によって予見された未来に応じて、現在の対処方法を確定していくという行為とは趣が異なり、道長に対する未来予測は、「当てもの」的な取り扱いになっている。女房らが呼び寄せたということと相俟って、ここでは、観相に対する社会的認知度が、『源氏物語』よりもむしろ低くなっているといえよう。

さらに、常に死と隣りあわせで戦いの場に身を置かざるを得ない武士たちの命運を語る軍記物語においては、どうだろうか。

『平家物語』巻第四は治承四年（一一八〇）の以仁王の挙兵とその失敗について語るが、その中の「鵺」や「三井寺炎上」の語りは、平家勢力に暗雲が立ち込めていることを暗示する不穏なものとなっている。そして、「源氏揃」と「通乗之沙汰」に相人が登場する。「源氏揃」では、「少納言維長（相少納言）」という「勝たる相人」が、以仁王に対して「位に即せ給ふべき相在ます。天下の事、思食はなたせ給ふべからず」と相する。その天下を取るという観相のことばによって、以仁王は挙兵を決意するが、それは失敗に終る。その後、「通乗之沙汰」では、次のように語られる。

昔通乗といふ相人あり。宇治殿・二條殿をば、「君三代の関白、ともに御年八十」と申たりしもたがはず、帥のうちの大臣をば、「流罪の相まします」と申したりしもたがはず。聖徳太子の崇峻天皇を「横死の相在ます」と申させ給ひたりしが、馬子の大臣に殺され給ひにき。さもしかるべき人々は、必相人としもにあらねども、かうこそめでたかりしか。これは相少納言が深くにはあらずや。

通乗のエピソードは『古事談』や『今昔物語集』にも見えるが、通乗という高僧の観相は、内大臣や天皇に対して流罪や横死という忌むべき未来を大胆に予見したにも関わらずそれが的中したというものだった。相少納言の場合は、以仁王の吉相を予言するが、それに基づいて行動した結果は挙兵失敗、という取り返しのつかない観相ミスを犯す。相少納言の観相は、あくなき権力欲に取りつかれた人々の責任転嫁の対象となっている。挙兵したいと思い、また、周囲も挙兵させたいと躍起になっているなかで、挙兵が吉であるという観相結果以外の予測が出たとして、挙兵を思いとどまったとも思えない。また、すぐれた相人の観相でさえはずれるというところに、天の理を越えた人間のドラマの展開する文学としての『平家物語』の面白さがある。

次に、『徒然草』に出てくる相人について見てみよう。前節三で引用した盗みに関する百四十二段の論述のすぐ後、百四十五段と百四十六段で兼好は観相について言及している。

百四十五段では、随身秦重躬が下野入道信願に対して「落馬の相ある人なり。能〃慎み給へ」と忠告する。ところが、当人が「いとまことしからず思ひける」と、信じないまま、落馬して亡くなってしまったというエピソードを紹介する。秦重躬の発言に対して、「道に長じぬる一言、神のごとしと人思へり」と人々は、秦重躬の占術の確かさを賞賛したと記されるが、そのあとのやり

とりとして、ある人が「いかなる相ぞ」と落馬の相について尋ねたところ、重躬「極めて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、此の相を負ほせ侍き。いつかは申誤りたる」と答えたということが記される。ここには、見たとおりのことがらを、合理的に分析する相人の態度が暗示されている。

また、百四十六段は、『平治物語』や『源平盛衰記』にも載る天台座主明雲のエピソードを紹介する。明雲は、あるとき相人に対して「をのれ、もし兵杖の難やある」と尋ねる。それに対して、相人は、明雲が天台座主という兵難に遭いそうもない立場にありながら、「仮にもかくおぼしよりて尋ね給ふ、これ既にその危みのきざしなり」と観相したという。そしてその通り、明雲は射殺されてしまったという。つまり、相人は、観相したというよりも、明雲のことばを聞いて、それが自分自身の未来に対する本人ならではの胸騒ぎであると分析していることになる。

ここには、『源氏物語』で桐壺帝が、自分の直観を裏付けるために観相を依頼したことと通底する考え方を看取することができる。

このように、他にも説話集など、日本の古典作品にける、相人のエピソードは枚挙に暇がない。そして、以上のことから、観相の根拠が必ずしも面相そのものにはなく、相手の行動の癖や思考パターンを読み取る洞察によっていること、相術には当たりはずれがあること、さらには、「高名せんずる人は、其相ありとも、おぼろけの相人のみることにてもあらざりけり」（『宇治拾遺物語』「東北院菩提講聖事」）と言われるように、相術の危険度について人々が充分に認識してきていることが理解できる。言うまでもなく、その根底には、人は常に未来に対する不安と自分の未来を知りたいという欲求を持っているという事実があり、人間を観察し、人間のドラマを描いてきた文学者たちが、観相ということを作品に描く場合には、術のすばらしさや不思議さを紹介するという博物誌的な興味からではなく、人間心理の襞や運命の機微を描くために人相見のことばに思わず耳を傾けざるを得ない人々を描くべく、観相という場面の緊張感を利用しているということが理解できる。

六　おわりに

前節で確認したような先行文芸における一連の観相話の中に巻一の一「理非の命勝負」を位置づけてみると、正連の観相結果を述べる人間観察のことばからわかるように、西鶴もまた、人相を見るという行為を不思議な神通力によって事件が解決したという文脈で用いているのではないことがより一層理解できる。

合わせて、すでに先行文芸で摘発されているような危うい相術に頼ろうとすること自体「笑はるる合点」だといえよう。さらに言うならば、いわゆる観相とは違って、人間観察による観相を行っているにすぎない宇土長浜の正連自身も、その道のプロから見れば「笑はるる合点」であるし、また、そういう正連を人相見の名人として信頼している地元の人々も「笑はるる」し、事件の挙句に正連を取り立てた藩主、「人の心質直になりて、道を守りけるとなり」となった結末も「笑はるる合点」なのかもしれない。そうして、次々と笑の鎖をたどっていくと、良いか悪いか、正しいか間違っているかと判断すること自体が無化され、不思議な突き抜けた解放感にとらわれてくる。もとより『伊勢物語』[43]初段「女はらから」のパロディとして登場した美童たち。その舞に夢中になって防犯がお留守になる城内。五百両盗んで、百五十両使って残りをとっておいた侍。また、彼が無理な理屈を展開して死ぬ最後に自分の罪を認めたこと。犯人を褒める城主。すったもんだの挙句平和が訪れた城内。すべてが、とにかく笑うしかないような空気のなかに包摂されてしまう。いつのまにか哄笑が、嘲笑から微笑みへと移っていく――。それは支配者・被支配者、弱者・強者の隔てを取り払ってしまう透明な笑いであり、西鶴が新たに描

こうとした笑いではないか。

＊『新可笑記』本文の引用は、すべて新編日本古典文学全集69『井原西鶴集④』（二〇〇〇・八、小学館）所収の本文による。

＊＊『徒然草』『源氏物語』『平家物語』『宇治拾遺物語』の引用は、それぞれ新日本古典文学大系（岩波書店）所収の右の①～④本文による。『大鏡』の引用は、古典文学大系21松村博司校注（一九六〇・九、岩波書店）のテキストによった。

①佐竹昭広・久保田淳校注『方丈記　徒然草』（一九八九・一）

②柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注『源氏物語　一』（一九九三・一）

③梶原正昭・山下宏明校注『平家物語　上』（一九九一・六）

④三木紀人・浅見和彦・中村義雄・小内一明校注『宇治拾遺物語　古本説話集』（一九九〇・一一）

注

(1)『井原西鶴』（一九二六・三、至文堂）参照。

(2)『新可笑記』に対する否定的な見解は、「登場する人物の内面に全然タッチしてゐないので、作者にとっても、また文学史的にみても、なんらプラスするところのない作品といはざるをえない」（暉峻康隆『西鶴研究と評論』下（一九五三・二、中央公論社）、「職業作者的安易さに馴れ、説話的興味の追求だけに終った作品」（野間光辰「西鶴と西鶴以後」〈『西鶴新新攷』〈一九八一・一、岩波書店〉初出は、岩波講座日本文学史第十巻『近世』〈一九五九・七、岩波書店〉）に代表される。

(3) 野田寿雄は、「はっきり言って文章は悪文であるし、構成もあまりまとまっていない」から、「全部と言わないまでも、かなり他人に代作させた疑いが濃厚である」と指摘（『日本近世小説史井原西鶴編』一九九〇・二、勉誠社）。また、江本裕も本書が複数作者による可能性が強いとする（「新可笑記」〈浅野晃・谷脇理史編『西鶴物語』一九七八・一二、有斐閣〉）。冨士昭雄は本書が「西鶴の生涯中、その作品が最も多く公刊された年」に出版されており、「これほどまでに多様の作品を同時期に出すとなると、代作者、助作者の存在の問題も考えられる」とする（決定版対訳西鶴全集9『新可笑記』「解説」、二〇〇二・一二、初版は一九七六・八、明治書院）。

(4)「『新可笑記』の版下」（『西鶴考』一九八九・三、八木書店）参照。

(5) 同右。

(6)「『新可笑記』における創作視点」（『西鶴浮世草子の展開』二〇〇六・三、和泉書院）参照。

(7) 一連の論考は以下の通り。

①「『新可笑記』巻頭章の趣向と主題」（『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第2集日本語日本文学専攻第2号、一九九七・三）

②「『新可笑記』最終章の考察―二話合体構成説をめぐる検討を中心に」（『安田女子大学紀要』第26号、一九九八・二）

③「死出の旅行約束の馬」考―『新可笑記』巻二の五の再検討」（『文教国文学』第38／39号、一九九八、三）

④「魂よばひの百日の楽しみ」考―『新可笑記』巻二の六の再検討」（『鯉城往来』創刊号、一九九八・三）

⑤「〈子細〉への誘い―『新可笑記』巻三の二「国の掟は知恵の海山」の作品構造」（『広島文教女子大学紀要』第33号、一九九八・一二）

⑥「『新可笑記』最終章の考察―二話合体構成説をめぐる検討を中心に―」（『安田女子大学紀要』第26号、一九九八・一二）

⑦「西鶴とお家騒動（下）―巻三の三を中心に」（『国語国文論集』第29号、一九九九・一）

⑧「〈殺害〉と〈慰藉〉をめぐる短編―『新可笑記』巻一の四・巻二の二」（『安田女子大学紀要』第27号、一九九九・二）

⑨「西鶴とお家騒動（上）―『新可笑記』巻二の四を中心に」『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第4集日本語日本文学専攻第4号、一九九九・三）

⑩「『新可笑記』の作品構成―各章間における相互関連の検証を中心に」（『鯉城往来』第2号、一九九九・一〇）

⑪「『新可笑記』ノート―成立解明に向けての一階梯として」）『国語国文論集』第30号、二〇〇〇・一）

⑫『新可笑記』作品構成補遺考」（『安田女子大学紀要』第28号、二〇〇〇・一）

⑬「〈藩主〉の位相―『新可笑記』巻五の三「乞食も米に成男」における操作機視点をめぐって」（『安田女子大学紀要』第29号、二〇〇一・二）

⑭「西鶴〈話の種〉―『新可笑記』巻四の二「哥の姿の美女二人」の創意をめぐって」（『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第6集日本語日本文学専攻第6号、二〇〇一・三）

(8) 新編日本古典文学全集69『井原西鶴集④』（二〇〇〇・八、小学館）所収の『新可笑記』全訳注。

(9)「『新可笑記』の「道理」と政道批判―『可笑記』『太平記』との関わり」（『江戸文学』第23号、二〇〇一・六、ぺりかん社）参照。

(10)「『新可笑記』巻一の三「木末に驚く猿の執心」試論――猿の復讐譚に潜む創意――」（『学芸国語国文学』第37号、二〇〇五・三）参照。

(11)「『新可笑記』巻四―三「市にまぎるゝ武士」の謎――犯人を捕まえたのは誰か――」（『日本文学』第54巻　第10号、二〇〇五・一〇）参照。

(12)「『新可笑記』に描かれる「裁き」について――「親子関係」を中心に――」(『愛知論叢』第81号、二〇〇六・九) 参照。
(13)「二つの笑い――『新可笑記』と寓言――」(『国語と国文学』第85巻第6号、二〇〇八・六) 参照。
(14)「西鶴について」(『山口剛著作集』第一巻、一九七二・四、中央公論社。初出は、日本名著全集第二巻『西鶴名作集』下、一九三一・一二) 参照。
(15)『補刪西鶴年譜考證』(一九八三・一一、中央公論社。初出は、一九五二・三) 参照。
(16) 前掲注 (3) に引用した決定版対訳西鶴全集9『新可笑記』「解説」参照。
(17) 前掲注 (6) に同じ。
(18) 前掲注 (7) 論文⑥参照。
(19) 前掲注 (9) に同じ。
(20) 前掲注 (13) に同じ。
(21) 前掲注 (7) 論文⑥参照。また、前掲注 (3) 野田寿雄論文、及び、富士昭雄「解説」、(4)、(6)、(12) は、分類方法や視点は異なるにしても、共通して話の分類一覧が掲載されている。注 (13) も全話にわたってモチーフの共通点でくくりながら論を展開する。
(22) 前掲注 (7) 論文⑩参照。
(23) 前掲注 (7) 論文⑫参照。
(24) 前掲注 (9) に同じ。
(25) 拙論「『本朝二十不孝』五巻二十話の内的連関」(『文芸研究』第111集、一九八六・一) において、『本朝二十不孝』は、巻中の各二話が親和性を持ち、さらに、巻毎に共通するモチーフを見出し得、さらにそれが、巻一から巻五に向けて「孝」を立体的総合的に描き出すためのダイナミズムによって展開していると論じたことがある。また、「〈顔〉文化史からみた西鶴の〈顔〉表現」『長野県短期大学紀要』第58号、二〇〇三・一二) において、西鶴が豊かな〈顔〉表現を展開しつつ、「疱瘡」による面貌の変化というモチーフを何度か用いていることを確認し、『武家義理物語』巻一の二「猴子はむかしの面影」において、西鶴が美人姉妹という設定を用いてその面貌の変化による運命の別れについて描いていることを論じた。
(26) 注 (8) 頭注赤字部分参照。
(27)「西鶴のたくらみ」(『江戸文学』第36号、二〇〇七・六) 参照。
(28) 拙論「西鶴が描く兄弟姉妹」(『長野県短期大学紀要』第60号、二〇〇四・一二) 参照。
(29) 前掲注 (13) に同じ。
(30) 前掲注 (8) 掲載の「巻一　あらまし」に拠る。
(31) 前掲注 (4) に同じ。
(32)「『新可笑記』の構造をめぐって」(森山重雄編『日本文学　始源から現代へ』一九七八・九、笠間書院) 参照。
(33)『新可笑記』試論――一の一、一の三、一の五――」(『西鶴試論』一九九一・五、和泉書院) 参照。
(34) 同右。
(35) 同右。
(36) 前掲注 (7) 論文①参照。
(37) 同右。
(38) 同右。
(39) 前掲 (30) に同じ。
(40) 引用は、『日本庶民生活史料集成28』(一九八〇・八、三一書房) に拠る。
(41) 前掲注 (7) 論文①参照。
(42)「『可笑記』の形成の様相」(『仮名草子についての研究』一九九六・一〇、おうふう) 参照。
(43) 前掲注 (7) 論文①参照。